医学教科書における電子化の可能性

園原麻里、酒井由紀子
慶應義塾大学信濃町メディアセンター

慶應義塾大学信濃町メディアセンター（以下、当館）では近年電子ジャーナルに次いで、利用の便をはかり、電子ブックの導入をすすめている。現在、キャンパスネットワークを経由して洋書を中心に 200 タイトル以上の電子ブックを提供している。

従来から単行書のなかでも学習に必要な教科書は、蔵書構築の面でも他資料より優先して資料収集が行われてきたコアなコレクションである。しかし、近年は予算緊縮のため、蔵書構築全体の見直しを余儀なくされており、電子ブック・印刷版両方を購入しているタイトルについて、並行維持の必要性が問われる時期がきていることを選書担当者は実感している。

教科書を電子ブックに移行することができるか検討するために、現在の教科書の利用動向と電子ブックの可能性について、以下 4 点のデータを収集し分析することとした。

1．電子ブックの利用統計（2007 年 12 月～2008 年 6 月）

2008 年度の教科書指定資料のうち、電子ブックとして契約している 21 タイトルの利用統計を抽出する。

２．印刷版資料の利用統計（2007 年 12 月～2008 年 6 月）

2008 年度の教科書指定資料のうち、電子ブックとして契約している 21 タイトルの印刷版の利用統計を抽出する。

現在の図書館資料の利用状況把握を目的として、１および２のデータ比較を行う。

３．慶應義塾生活協同組合信濃町書籍部（以下、生協）による教科書販売データ

教科書を利用するには、教科書の購入がまず予測される。そこで 2008 年度の教科書および参考書として指定された資料の販売データを入手し、販売実績を確認する。図書館資料の利用以外に存在する教科書のニーズの把握を目的とする。

４．慶應義塾大学医学部 3 年生対象のアンケート調査

まず、教科書の購入・図書館資料の利用等について予備アンケートを行う。次に、電子ブックが導入されることで、今までの教科書購入や図書館資料利用の行動パターンがどのように変わると予想されるかについてヒアリングを行う。この調査から電子ブックの利用可能性について検討する。

上記分析をとおして現在の教科書の利用動向の把握を行い、教科書における電子ブックの可能性について検討したいと考えている。

2008 年 6 月 13 日現在収集したデータによると、電子ブックの利用も図書館資料の貸し出し件数もあまり多くない。長期的に参照する教科書は入手するという利用者の行動パターンが明らかになっている。印刷版から電子ブックへの移行については順次調査中であるが、全文検索などの特性が利用者に好まれているようであり、広報等の工夫で、現状よりも多くの利用が見込めるのではないかと予想している。